

将軍家と日野家・山科家

——日野康子と日野栄子の役割を中心に——

田 端 泰 子

はじめに

室町幕府第三代将軍足利義満の時代は、室町幕府最盛期といわれる。その理由の大きな部分は、将軍の権威と実力が管領以下の有力守護大名を圧倒し、次々に有力守護家を武力で打倒し、将軍家の武家政権での圧倒的優位を実現したことに由来する。武家が国内を統治する体制は鎌倉幕府時代から徐々に確立し、紆余曲折をへて、足利義満時代に有力守護家を排除できたことによって、完成の域に至り始めていた。その時代に将軍となった義満は、征夷大将軍の地位に飽きたらず、天皇権の篡奪に向かって進んでいったと言われる。最も明確にこの説を唱える今谷明氏は、その著書『室町の王権』⁽¹⁾の中で、天皇家の掌握し続けてきた「叙任権」や「祭祀権」を獲得し、改元や皇位に干渉し、前代未聞の「国王御教書」を発給し、国際的に「国王」として認知され

るために、明に「日本准三后道義、書を大明皇帝陛下に上る」に始まる書を、明の第二代皇帝建文帝に奉り、首尾良く返詔をもらったことを述べている。

こうした義満の「王権篡奪計画」⁽²⁾の一環として使われたのが義満正室日野康子であったとされる。但し将軍の正室として著名な人は、この時代、康子のほかに、義満の子息で次代の将軍となった義持の室日野栄子があり、また日野氏の女性たちのうち天皇家の女房に入った人も多かったので、本稿では足利義満、義持時代を、公家日野家や山科家の側から検討することによって、本来天皇家の臣下たる公家が、どのようにに将軍家と関係を取り結んでいたかを、足利義満時代とそれに接続する義持時代について、検討したいと思う。

特に公家日野家については、一族の系図を作成し、そのなかで、歴代当主の兄弟姉妹が、どのようなかたちで朝廷に仕えていたのか、また将軍家や寺社に入っていたのかを考察してみたい。

一 足利義満時代の日野氏、山科氏

室町時代の中でも、將軍家の威信と権力が最も高まったのが、三代將軍足利義満時代である。この義満期の將軍家と日野家の関係、また日野家と緊密に交流を深めた公家山科家の動向を検討することで、日野家の歴史的位置と、日野重光の姉妹で足利義満の正室となった康子、義持の正室となった栄子の姿を浮かび上がらせてみたい。なお、重光の娘重子は足利義教の側室になっているので注目すべき女性であるが、論述が複雑になるので、本稿の考察からは省くことにする。

足利義満（一三五八―一四〇八）の父は足利二代將軍義詮であり、母は石清水社僧善法寺通清の娘「紀良子」である。この紀良子は後円融天皇の実母である崇賢門院（後光厳天皇の典侍仲子）の姉妹である。したがって義満と後光厳天皇は従兄弟であるということになる。⁽³⁾ 義満は、父の死により貞治六年（一三六七）十歳で家督を継いでいる。しかしこの年齢では將軍としての機能を果たせる能力が備わっているはずもなく、管領細川頼之が幕府の実権を握り、政務を主導した。康暦元年（一二七九）、二十二歳の義満はその頼之を失脚させ、代わりに斯波義将を管領に任じて幕府の実権を自ら掌握する。次いで永徳二年（一三八二）左大臣、翌年源氏長者となり、淳和院・奨学院両別当を兼任し、准三宮の宣下を受け、武家の官職・実権と公家の官職を合わせ持つ地位に昇った。その実力を背景に明徳三年（一三九二）南北朝合体を大内義弘の力も借りつつ実現し、後亀山天皇から後小松天皇への三種の神

器の譲渡を実現させた。この年義満は三十五歳であった。応永元年（一三九四）義満は將軍職を子義持に譲り太政大臣となる。一三八五年生まれの義持はわずか十歳である。將軍家の実権は手放さず、天皇家の権限にも肉薄していこうという義満の意図が見えるようである。

翌二年その太政大臣を辞して出家したのは、自らが將軍家の「上皇」として、幕府政治のいわば「院政」を執り行い、また天皇の臣下としてではなく自らの力で「日本国王」として対中国外交を行うためであったと考える。出家後の義満は対中国外交を積極的に推進し、和寇を鎮圧し、有力大名を弾圧してその力を削減し、二番目の正室日野康子を「准母」の地位に就け、北山邸を造営して、朝廷の儀礼を吸収し、それに準じた幕府儀礼を作ろうとするのである。まさに義満の死の直後に朝廷から「太上天皇」の尊号が与えられたのは、義満の意図の後半生の夢にかなうものであったのではなからうか。

このように義満の真意は、天皇の陪臣としての立場を蹴って、そのために辞官・出家し、実質的に獲得し終え初めている「日本国王」として、中国との国交を進展させたかった点にあったと思う。今谷説に見られるように、国際的にも日本の「国王」として中国の皇帝から国王に封じられることが、外国からは日本の天皇を越える存在として認められることになるというメリットがあったからである。また明との貿易の利はあまりにも大きかったからである。

一方天皇家の後小松天皇は、永和三年（一二七七）の生まれであるので、南朝を吸収した南北朝合一の年、十六歳であり、翌明徳四年親政を開始するが、実権は足利義満に握られ、後小松天皇の姿がはつきり

見えるようになるのは、義満の晩年とその死後、天皇がその子称光天皇に譲位して院政を行つた時期になつてからである。

日野重光は応安三年（一三七〇）に生まれ、南北朝合一後の応永元年（一三九四）権中納言となつたのを皮切りに、権大納言、正二位、従一位、大納言と昇進し、応永二十年（一四一三）後小松天皇の「院執権」となつたが、同年四十四歳で没している。

この時代の公家山科家の当主は教言のりときである。教言が生まれたのは嘉暦三年（一三三八）であるから、足利義満より三十歳年長で、日野重光より四十二歳年長であつたことになる。山科家は初代教成が、その父で後白河院の近臣であつた平業房と母丹後局から相続した山科荘を膝下荘園として獲得し、その他の所領も後に家領として取得し、公家としては内蔵頭を世襲し、御厨子所別当を兼ねたので、供御人を支配し、また内蔵頭に付随する役目として、天皇家への「御服調進」の義務を負つていた。教言は八歳で従五位下となり、その後内蔵頭、従三位、参議、康応元年（一三八九）南北朝合一の少し前に権中納言になつたが、翌年この職を辞し、応永二年出家している。したがって、教言の日記『教言卿記』⁴では、自身の足利尊氏・直義・義詮との親交、それにも増して寵遇を受けた足利義満に関する記事と、自身が高齢になつたため、勤めを預けた子息教興と孫教豊などの公家としての活躍が多くの枚数を割いて語られる。

また山科教言は将軍義満の正室を出し続けた日野家の重光とも親しく、特に教興は父に代わつて内蔵頭となつて以後、公家として天皇家に仕えて、御服調進の家職を勤め、禁裏「御番」を交替で勤仕する一

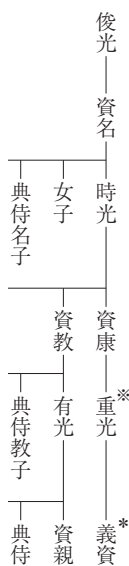
方、義満の北山第に毎月一日に参賀し、朝廷でも北山第でも雅楽を奏し、さらに日野重光邸にも出入りして日野邸の風呂に入り、地蔵講などの御用を「逗留（宿泊）して務めるといふ」、天皇家に仕える公家の一員であるとともに、将軍家にも仕え、また日野家の家司の役目をも兼ねるといふ忙しい日々を送っていることが、応永十年代から義持時代の応永二十年ころまでの記事から読み取れる。しかし日野重光が応永二十年（一四一三）三月十六日に亡くなつて以後は、内蔵頭は教豊が嗣ぎ、「院執権」も烏丸豊光に移つたため、日野義資との関係は重光時代ほど緊密ではなくなるが、山科一族中の山科教高は日野持光と親しかつたためか、足利義嗣の処刑に連座させられている。⁶

二 日野家の人々

本章では、室町期特に足利義満・義持期の日野氏を中心に、日野氏の室町幕府や足利将軍家との関係、天皇家・院との関係、また日野氏の援助を期待して日野氏の家司のような位置にまで到達した公家山科家について、山科家当主教言とその子教興の日記などを素材に考察する。

室町期の日野氏の主要人物を抜き出すと左のようになる。⁷

系図1 室町・戦国期の日野氏



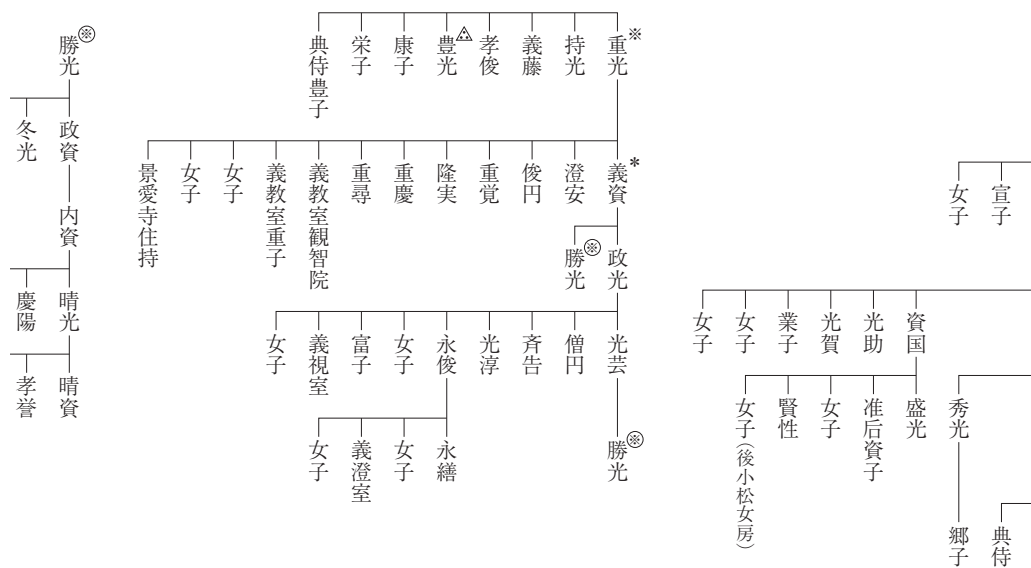
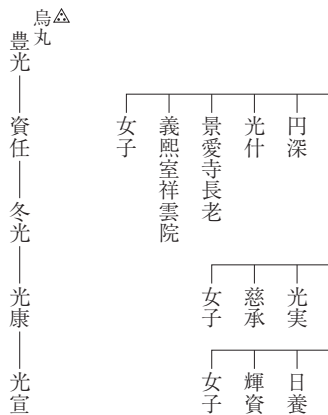


表1 室町期、日野家代々当主の兄弟姉妹

俊光	男8女2	公家5、山僧2、寺僧	院女房、公家妻
時光	男2女3	公家2	典侍、公家妻2、不明
資教	男4女3	公家2、山僧、醍醐	義満室、公家妻2
盛光	男1女1	醍醐	准后資子、院女房、公家妻
有光	男1女1	公家	典侍
資親	女2		院典侍2
重光	男4女3	公家3、僧(東北院)	義満室、義持室、典侍
義資	男7女5	興3、東大、禪、山、公家	義教室、義教室、景愛寺住持
政光	男1(勝光)		
光芸	男4女4	禪2、山、興	義政室富子、義親室、不明(早世)2
永繕	女3		義澄室、公家妻、不明
勝光	(実は政光の男)		
政資	男4女3	公家2、山、興	義尚室、景愛寺長老、不明
晴光	男3女1	禪、山、興	遊佐長教妾
輝資	男3女2	公家、興、僧(本満寺)	神主(津守氏)妻、不明
山：延暦寺円仁流	醍醐：醍醐寺	興：興福寺	寺：園城寺円珍流

右の系図に基づいて、日野家当主の兄弟姉妹がどのような壮年期・老年期を送ったのかについて考察してみる。



右に作成した表から、室町期の日野氏の当主の兄弟姉妹が、成人したあとのような社会的地位を得ていたのかがわかる。当主は日野氏を継承し、一族は裏松氏、烏丸氏、柳原氏、日野町氏などに必要に応じて養子に入り、氏族を継承・発展させた。日野重光の弟豊光が烏丸家の当主となったのがその好例である。豊光は足利義持に仕え、義持の出家の時、自らも出家している。このとき四十六歳であったという。公家としての務めも果たし、権中納言正二位の官職をもらい、また重光の死後、「院執権」も務めている。

そのほかの日野家の当主の兄弟は、公家として生涯を終えたものは時代が下がるほど少なくなり、室町初期には五人もあったのに、末期には一、二人に減少していることが見てとれる。代わって増加したのは僧になった男性である。山門、寺門、興福寺という平安期以来の大寺に入ると共に（重光の兄弟が入った東北院も天台の寺院である）、一族の寺である日野の法界寺の別当を兼ねる者も多く、「日野別当」の名で呼ばれた人が多い。晴光の兄弟慈承などがそれにあたる。慈承は「日野別当、直叙法眼、横川長吏」を歴任し、同じく天台山門派の京の尊勝院に入った人であり、藤原康親の子であったが、日野家の養子として日野家に入り、日野家関係の寺の継承をなした人である。

また僧となった日野家庶子の姿を検討すると、室町期後半になるほど、禅宗の寺や日蓮宗の本満寺に入った人があることに気付く。日明貿易を推進した足利義満やそれを継承した義政の政策や、法華衆徒が一揆を起こす時代の波が、日野家の家系図に影響を与えていることがわかる。

中でも注目されるのは、日野富子の兄弟に聯輝軒永俊がいること、永俊の子永繕は富子の甥にあたり、その永繕の姉妹は足利義澄の正室となっていることである。また聯輝軒の首座である永俊は、義政の猶子でもあったことが、系図の付記から知られる。義政にも富子にも目を懸けられた親子であったことがわかる。

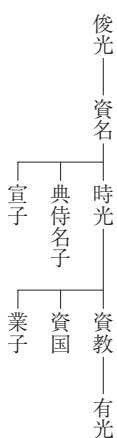
聯輝軒とは足利義満が開創した臨済宗相国寺派本山相国寺の常德院内に開かれた一院で、開基は足利義持・義教の弟虎山永隆である。そのためこの永隆は「相国寺永隆」あるいは「聯輝軒永隆」と呼ばれた。嘉吉二年（一四四二）四十歳で亡くなったという。この聯輝軒は、禅宗寺院の通例に漏れず、室町期、荘園の代官として、寺僧を地方に下らせたり、荘園領主などに貸し付けをする役割も果たしている。のちに述べる山科家の荘園の一つ備中国水田郷の年貢を、系図に見える永俊が請け負っていたので、山科家の家司は文明九年四月二十日、年貢のことで永俊の元に出かけ、また水田郷の代官職のことにつき延徳三年、手紙でやりとりをしている様子がうかがえる⁽⁸⁾。

日野家当主の姉妹に目を移すと、足利將軍家の正室になったものが多いことが目を引く。義満室薬子、康子、義持室栄子、義教室観智院と重子（勝智院）、義政室富子、義視室、義尚室、義澄室の九人にも上る。義満以来、室町將軍家の正室は永らく日野家から出ることが慣わしとなっていたことがわかる。

しかし日野家の女子は朝廷や院にも典侍などの女房、また院女房として仕えていたので、その中から天皇家の妻となる女性が誕生するのは奇異なことではない。

例えば日野宣子は後円融天皇時代の康暦元年（一三七九）正月、当時まだ権大納言にすぎなかった義満が、天皇に盃を献げる前に「主上の御酌を取る」という不敬を働いた、全く異例の給天盃であったが、それを準備した人々は「准后二条良基、三宝院光濟僧正、二位尼日野宣子」らであったとされる。⁹この日野宣子は「岡松一品」と呼ばれ、義満正室日野業子の叔母に当たる人で、天皇家の宮廷内に大きな力をもっていただけでなく、義満と業子の婚姻の仲介をした人であり、「歌人」でもあった。義満に宮中の作法を教えた二条良基と共に、義満最期でその応援団の一員であったと考えられる。宣子、業子に關係する部分の日野家略系図を左に掲げる。

系図2 日野氏略系図



のちに詳しく述べる義満室康子は、日野家の女性として初めて天皇の准母となつてゐる。また盛光の姉妹資子は、「称光院母后、後花園院准母」として応永三十二年（一四二五）准后となつて「光範門院」の院号をもらひ、永享五年（一四三三）五十歳で出家した。このように准后・准母となつた女性も二人出ているのである。

そのほか日野家の女子で尼寺に入り、景愛寺長老や住持になつたもののあることが注目される。景愛寺の創建は建治三年（一二七七）で、臨濟宗の尼門跡寺院として如大尼が創建した寺である。南北朝期以後は禅宗尼寺の第一位として栄えた。その後景愛寺六世で光厳天皇皇女

惠嚴^{えげん}禅尼が御所の聖観音を安置する寺として宝鏡寺を開山したという。応仁の乱後は景愛寺は寺勢が衰え、宝鏡寺住持が景愛寺を兼ねたという。禅宗寺院に対しては、將軍家は手厚い経済的扶助をなしていたことから、將軍家正室からの援助も大きく、そうした關係から日野家の女性もこの寺に入つたのであろう。

その他の女子は公家と婚姻をしているが、室町期の終わりには遊佐氏という武家や、津守氏のような神主家との婚姻が登場するのは、公家としての家格が全体的に揺らぐ戦国期に入りつつあったためであらう。

三 足利義満・義持時代の日野氏と山科氏

— 日野康子の登場

このように、日野家は室町期、代々の足利將軍家の正室を出すという輝かしい歴史を形造つた。その嚆矢となつた足利義満時代の康子について少し史料が残つてゐるので、義満や次の將軍義持と、康子の生家日野家との關係、またこの時代の日記に残している山科氏との關係を検討し、どのような条件のもとに三家が結びつきまた離れていかざるをえなかつたのかを検討する。そのことを見るなかで、日野家と山科家の当代における立ち位置を明らかにする。

最初に検討するのは、義満の正室になつた日野業子についてである。この人についての史料は少ないが、業子は初め禁裏で典侍となつてゐたことがわかつてゐる。これ以前の日野家の女性が、公家の家の娘と

して宮中の女房として奉公するのが順当な道筋であったことは、先述の日野宣子の例からも明らかである。宣子の姪である業子も朝廷に出仕し、典侍となつて後円融天皇に仕えていた。そうした天皇、上皇の側に仕える女房たちに言い寄り、妻や側室にしたのは、天皇の親族を自認する義満であった。

業子は正室となり、そのほかの朝廷の女房たち(加賀局、新中納言局、一条局、三位局)は側室となつてゐる。

応永年間の十三年までの日野家の当主は重光である。重光は応永元年権中納言に任じられたのを皮切りに(二十五歳)、三年権大納言従二位、十年正二位、十五年従一位、十八年大納言と昇進し、二十年後小松天皇の院執権となる。応永初年ごろ、父資康は已に亡く(明德元年死去)、父の弟資教が日野家を率いていた。しかし叔父資教の官位昇進は重光に及ばず、応永十二年五十一歳のとき出家している。義満の最初の正室となつた先述の業子は資教の姉妹であるから、重光にとって叔母にあたる人であつた。この業子が応永十二年七月十一日に病により五十一歳で薨じたため、亡くなつた業子に従一位が与えられ、その兄弟資教も正二位から従一位に叙されたが、この日資教は出家したのである。応永十二年に義満は四十六歳、業子は「五十一歳云々」と『教言卿記』にあるので、義満より年長の正室であつたことになる。亡くなつた業子に代わり、正室の座に座つたのが業子の姪で重光の一歳年上の姉康子である。康子は応永四年に義満が造営した北山殿の内部の「南御所」に住んでいたのので「南御所」と呼ばれており、このことから康子を室に迎えたのは、応永初年と見られる。しかし『教言

卿記』に康子が初めて登場するのは応永十三年五月九日である。したがつて、業子の死後、業子に代わり「南御所」康子が義満正室としての務めを正式に果すことになったと考える。以後康子は義満に同行して後光厳後宮で広橋家出身の崇賢門院(仲子)や喝食聖久(義満の娘)と共に、兵庫へ明船を見に出かけたり、義満・聖久と共に伊勢神宮へと輿を連ねて参つたりするようになる。康子の地位が正室として安定すると、日野家の中心も資教から重光へと交替する。

もともと義満は資教邸に臨んだりしていたが、資教より若い重光を特に引き立て、重光邸で義満は自身の子女の着袴と魚味の儀を行わせるほどであつた。⁽¹⁵⁾ 明德の乱(三九一年)応永の乱(三九九年)で山名氏、大内氏を將軍家の前に平伏させた義満は、公家日野重光やそこに集う日野一族また山科家などの公家を使つて、後小松天皇と廷臣たちをより強力に牽制しようとしたと思われる。天皇家に対して最も大きな圧力をかける機会は、応永十三年に訪れる。

応永十三年十一月、義満はその子(義昭)の魚味の儀を再び日野重光邸で行わせ、重光への信頼度の篤いことを世間に見せつけた。重光が日野家領能登国若山荘の半済停止を義満から獲得したのは、こうしたご奉公に対する見返りであつたのだろう。但し重光は自身の所領に関する支援ばかりでなく、山科家など公家の所領や家職、また相国寺常德院領など寺社の所領についても、義満に対し守護など武家からの保護を訴えており、公家・武家の後ろ盾としての役割をよく果たしていた。⁽¹⁶⁾

十二月二十七日、通陽門院が薨じた。通陽門院厳子は後円融天皇の

上臈から後宮に入った人で、父は三条公忠であり、時の後小松天皇の生母であったので、准三后となり、応永三年に院号宣下を受けていた。義満と親しくまた幕府からも京都五条町南頼の地を安堵されたりして⁽¹⁷⁾おり、足利幕府とよい関係を築いていた女院であった。なによりも厳子は時の天皇後小松天皇の生母であったから、義満が尊重したのは当然である。その通陽門院厳子が亡くなったことが、その後の女院制度に影響を与えることになる。

このとき義満は通陽門院の死に対して、天皇一代の間に父天皇とこのたびの母通陽門院の二度の「諒闇」は不吉であると日野大納言重光に述べ、四条天皇の例を「不快」としてあげた。四条天皇は鎌倉前期の天皇で、貞永元年(二三三)二歳で即位し、仁治三年(二四二)正月九日在位わずから九年余で没した天皇である。実際には、日野重光が先例を調べさせると、一条天皇、四条天皇、後醍醐天皇の時代に、一代両度の諒闇があったことがわかった。しかし四条天皇は幼少で即位し、十二歳の時滑って転倒したことによって死去したのは不吉である、後醍醐天皇は南朝の初代であって、当今の流れとしては先例とすべからず、両者ともに不吉だという義満の思惑によって、空位十一日のあと幕府の推す後嵯峨天直が即位した。義満は一条天皇の事例は無視した⁽¹⁸⁾のである。一条天皇の場合は不吉ではなく、むしろ佳例であったことは知られていた。しかし南北朝合一を成し遂げたのは他ならぬ義満であったため、皇位継承問題の決定権はこの時代、ほとんど義満の手中にあったといっても過言ではないから、先例を無視した義満の強引な発言が通つたのであろう。

この事の本質は、後小松天皇の父であった後円融天皇が薨じたのは譲位の十一年後の明德四年(一三九三)であるから、このたびの母厳子の崩御により、在位中二度の「諒闇」(天子が父母の喪に服する期間)を迎えることになる。それは避けなければならない、ゆえに准母を置く、というのが義満の本心であった点にあった。義満は例の如く、形式的に公家の意見を徴したので、「准母を立てることは、生母を他人になさるゝの条、父母の孝道に背く」と反対した洞院公賢(前太政大臣)もあつたが、義満の意志は固かった。では次には、誰を准母とするかの問題で日野重光らの公卿は行き詰まった。重光から相談を受けた関白一条経嗣は、義満の意を汲んで、義満室「南御所」康子に准三宮宣下を受けてもらい、国母に准ずるようすることを提案したので⁽¹⁹⁾ある。

この時に発給された勅書を左に掲げる。

勅、易彰牝馬之貞載坤卦、詩揚睢鳩之德歌国風、若稽舊章、咸為令典、從二位藤原朝臣某(康子)者 朕之准母也、柔順表質、嘉淑有詞、降紫詔哉既加二品之崇班、記彤管哉、今准三宮之貴寵、宜授邑土五百戸並年爵内外三分、主者施行、

応永十三年十二月 日

准后宣下の勅書には、古代以来の先例を踏んで「睢鳩」(鷹科の鳥みさぎ)のように夫婦として仲が良かった点も考慮し、すべて「令典」すなわち古代以来の法典に則り、准母となすことに決めたことを述べ、領地として「五百戸」と年爵が授けられることが記されている。それと共に、康子の人柄について「柔順」「嘉淑」などの詞が並べられて

いることから、康子は柔和で貞淑なひととなりであったことが知られる。

康子が准母になり、院号宣下を受けるといふ新提案は、義満が天皇家を篡奪するための強引な施策として打ち出されたものではなく、朝廷、公家のしふしふだが了解のもとに行われた策であったことがわかる。

朝廷の力は確かに將軍家に圧倒されてはいたが、経済的支援を大きく幕府に頼っている義満期、現役將軍義持よりも圧倒的に発言権の大きい義満の意向を受け入れることこそ、後小松天皇の時代を安泰に維持する基盤になったと思う。後小松天皇の正室もまた日野家の盛光の姉妹資子であり、資子は一三八四年生まれと推定されるので、応永十三年（一四〇六）には二十三歳であつたと思われる。後小松天皇と資子の間の子称光天皇は、没年が正長元年（一四二八）で、このとき二十八歳であつたとあるので、称光天皇は応永八年（一四〇二）生まれであつたことになる。よつて資子はすでに後の称光天皇を生んでおり、応永十三年に皇子は六歳になつていたと考える。

通陽門院厳子の五十五歳での死により、応永十三年十二月二十七日、その日のうちに義満室康子は准母とされ、三宮に准じられた。北山殿義満、室町殿義持を初め、関白一条経嗣以下の廷臣たちは、日野康子の元に続々と参賀した。翌応永十四年正月には、山科家は例年通り先ず北山殿義満に年始の挨拶に出かけ、次に康子に参賀し、その次に日野重光、次に室町殿義持を訪れている。⁽²¹⁾二月十八日、義満は康子と共に奈良へ遊覧に出かけ、義満の娘聖久と日野重光も同行した。二月二

十七日、義満は石清水八幡宮に参詣する。公卿として日野重光ほか五人の公家が従い、衛府として伊勢貞長ら三人も従い、さらには殿上人として御供をした山科教興には山科家司三人と山科家のすべての中間が付き従っている。⁽²²⁾このように康子の実家日野家と日野家の家司的存在になつていた公家山科家は、総力をあげて義満や康子に仕えていたことがわかる。

三月五日、康子は「北山院」の院号を賜る。すると山科教興は院司の一人に補せられている。山科家には新たな名譽が加わることになった。院司になつたことにより、山科家が管掌する「御服所」には、さつそく女院から「五衣」や「几帳」の調進の注文が入っている。⁽²³⁾

三月二十三日、「北山女院」の入内がにぎにぎしく挙行され、一条、近衛、菊亭、徳大寺、西園寺、日野（重光と資藤）、洞院、花山院の「公卿」に次いで、山科教興などの殿上人、隨身、小雑色、舍人の男性陣の名のあとに、公家の妻たちや公家出身の女房たちの名が逐一書き残されている。⁽²⁴⁾そして四月初めには入内の実質的主催者である日野重光邸には、入内行事に供奉した日野町資藤、柳原氏などは、樽持参で「無為」を祝いに集まつている。⁽²⁵⁾

日野家に対する義満の好意は、その後まもなくして表に現れ、十一歳であつた重光の子義資は北山第で義満の前で元服するという栄譽を被っている。⁽²⁶⁾

つまり北山院の入内、女院号拝領は、義満の内意から出たものであつたが、日野重光や、康子・重光の実母池尻殿、後小松天皇室日野西資子（日野西資国息女・後の称光天皇と小川宮の実母）など、日野家一族

の男女が背後から北山院を後見している態勢を作り上げていたからであると思う。日野家の娘たちは、足利家に次々正室を出す一方、資子のように天皇家や院の女房になった女性たちが、公家となった一族男性と協力して、朝廷側から一族の繁栄に尽くしていた様子が見て取れる。

応永十四年三月に康子が准母として北山院の号を賜って以後も、北山院は義満と共に北山殿(北御所に義満、南御所に康子)に住んで、義満の伊勢参宮に遅れて同道したり、丹波久世戸や若狭矢穴に行楽して、仲睦まじい姿を史料に残している。²⁷⁾

北山院の誕生で最も変わったのは、応永十五年三月八日から二十八日まで、後小松天皇が北山院御所に行幸したり、北山第で舞楽を觀賞したりしたことで、義満と天皇家の関係が急速に好転し強まったことである。天皇の行幸を控えて義満は楽を北山第で演奏させ、行幸に備えている。この行幸では、和歌、猿楽や連歌、舞、蹴鞠などが催され、義満から天皇に砂金百両・金欄十段・南鐐(銀)三十両などが献上された。天皇は崇賢門院(後光厳後宮・広橋仲子・後小松天皇の祖母にあたる)御所にも行幸し、義満の愛息義嗣を正五位下、左馬頭に任じ、還幸している。義嗣は還幸後さらに従四位下に叙された。²⁸⁾二十日間の行幸の間に、猿楽・蹴鞠・和歌・舟遊び・早歌・白拍子などを楽しんだ後小松天皇をもてなした主体は足利家であったが、その財源は妻を准母とした義満や、日野重光から出ていたことは容易に想像できる。天皇が御所に還幸した三月二十八日、日野重光は正二位から従一位に、義満の愛息義嗣は早くも従四位下に叙され、左近衛中将に任じられる。²⁹⁾そ

の上、翌月、応永十五年四月、義嗣は内裏で元服式を挙げるのである。³⁰⁾これも前代未聞のことであった。そして義満と後小松天皇の蜜月期は義満の死(同年五月)まで続くのである。

義満時代に後小松天皇を中心とする朝廷との関係は最も良かった。その理由は、右の行幸や義満の北山第での、また義嗣の内裏での元服の事実を示されるように、義満から天皇家に対し資金援助が手厚くなされたためである。義満は先述のように大守護大名を次々に圧倒し、合一を果たした朝廷に接近することを公家を介して成し遂げていたので、山科家だけに留まらず多くの公家は、將軍家に接近してその御用を果すことで、公家であるが義満の元に真つ先に参賀するという、公武が共に義満に臣従している態勢を作り上げていたことがわかる。かつて中世史研究者黒田俊雄氏は、中世の政治体制を「権門体制」と呼んだが、この言葉は義満時代が最もよくあてはまる。かつてないほど、義満時代には公家が天皇家と共に將軍家に臣下の礼を尽くしていたのである。

四 日明貿易を握る「日本国王」

ではそうした義満の公武双方をひれ伏させた背景にあるものは何だったのだろうか。その一つは、日明貿易の利が義満の手に集められた点にあったと思う。応永十四年九月十五日、義満は例の如く兵庫へ明船を見に出立した。京に戻ったのは二十二日である。その日の『教言卿記』には帰朝の明船が二十万貫を義満に進呈したことを記し、

「珍重」と感想が述べられているのである。このように日明貿易の利は、船主の禪宗寺院や大商人にも入ったが、勘合符を発行し、船主に請け負わせて利益を回収し、「日本国王」として朝貢貿易を実現した義満の手許に、莫大な銅銭をもたらしたことがわかる。

義満はその晩年、禁裏と密な関係を築いており、しょっちゅう禁裏に出かけ、そのたびに日野重光は義満に扈從しており、山科教興も禁裏で義満の「陪膳」役をつとめるなど、⁽³¹⁾義満は公家の中の日野一族に親しい人々を、自身の臣下のように扱っていた。そうした朝廷への接近の仕上げは、同年(応永十四年)十月十七日の錢十萬疋の禁裏への献上である。十萬疋は一〇〇貫文にあたる。ゆえに先述の二十萬貫の中から一〇〇貫文という大金が、義満から禁裏へ献上されたことになる。後小松天皇は義満に対し負い目は感じただろうが、義満からの経済的支援に対する感謝の念はそれを上回ったのではないかと思う。

義満室康子が応永十四年三月に北山女院となることによって、將軍家と朝廷の関係はより一層緊密になった。その現れとして、来年正月の天皇の「元三御服」の費用は康子方から出されることになり、十月にその目録が下され、費用を注進すべきことが山科家に言い渡された。代々の天皇の御服調進の仕事を担当してきた内蔵頭を家職とする山科家は、日記に「目出々々」と記している。⁽³²⁾

義満が得た大きな利は日明貿易の利益に止まらなかったことは勿論である。そしてその財の使い方も広範囲にわたっており、朝廷ばかりでなく公家や寺社に対してもなされていることは注目できる。公家花山院忠定の邸宅修理費として義満は一万五千疋(百五十貫文)を贈って

⁽³³⁾おり、紀伊国の日前国懸社に対しては造営費として三千貫文を寄進している。⁽³⁴⁾花山院家への助成に対し、同じく公家である山科教言は「言語道断、珍重々々」、「花喜悦之至、定不知手足之舞踏坎」と日記に記して、驚きを隠さなかった。

応永十四年一年間の義満の参内は特に多く、殆どの参内には日野重光を伴い、時々山科教興も御供している。そのため、公家の中で日野重光に近づきたい四条隆直などは、教興に重光への口入れを頼んでいる。⁽³⁵⁾義満が参内を繰り返して「禁裏御歌合」に加わったり、「御貝覆」の勝負に入ったりしたことは、⁽³⁶⁾後小松天皇との関係が極めて良かったことを示す。またたびたびの参内によって北山院の立場を強めるねらいもあっただろう。そうした参内を繰り返す中で、天皇家の「元三御服」や「引物」(引出物)の小袖などが、義満や北山院からの献上というかたちで登場する。

応永十四年十二月末に義満から天皇に献上される御服は、御冠、御直衣、御帶、御あこめ、すずしの御袴、御大口、御宿直物、御桧扇、御鼻紙であった。これらとは別に北山殿義満から長橋局に渡される予定の「御小袖十重」はおそらく引物であろう。⁽³⁷⁾

朝廷に仕える公家としての山科家は、勿論廷臣でありその務めは果たしていたが、義満方から天皇の御服調進の費用負担がなされ、日野重光が義満に最も信頼される公家であったため、日常的に「裏松」重光邸に出入りして、重光にも仕えていた山科教興は大忙しとなった。この年には義満の参内には重光とともに参会し、また義満の陪膳を何度も勤め、単独で義満への「申次」もつとめるようになっていた。そ

のうえ教興は北山院にも仕えていたので、年末に女院に歳末を賀して挨拶に行ったとき、絹の唐物で色々に染められた小袖を頂いたので、父教言は「希代之重宝也」「自愛々々」と喜んで⁽³⁸⁾いる。日明貿易で入ってきた唐物は北山院の元にもたらされていたのであろう。

応永十五年（二四〇八）正月の日記に、山科教言は禁裏四方拝のうち、北山女院の拝礼に参加した人々の名を挙げている。公卿は関白一条経嗣、左大臣近衛良嗣など十九名で、その中に日野重光と日野町資藤が含まれている。殿上人は烏丸豊光など十七名で山科教興はその中に⁽³⁹⁾いる。つまり日野家は義満側近の公家としての地位を築いており、山科家は公家として朝廷に仕える一方、義満や北山院康子の御用を務めていたことがわかる。むしろ義満と康子へのご奉公は、公家としての務めを上回る働きが求められていたようである。前年の応永十四年正月に北山殿義満、次に准后日野康子、次に室町殿義持に歳首を賀した山科家の面々は、教興、教有、教高、教豊（教興の子）、持教、徳菊丸後の（嗣教）の六名にも上り、⁽⁴⁰⁾山科家一族の青年が挙げて將軍家に拝謁していることがわかる。中でも三十九歳の教興は、八十歳になった老体の教言に代わる山科家当主として、また日野重光の家にも出仕したり逗留するという、忙しいおつとめの日々を送っている。

かつて応永十二年に教言邸が類焼したときには、教言は義満から北小路の邸宅を与えられ、邸宅造作の費用として河内葛葉関からあがる率分（関銭収入）を与えられるという御恩を受けていた。⁽⁴¹⁾このあと、教言は日野重光に「扶持」（援助）を謝している⁽⁴²⁾ので、邸宅拝領と造作費用助成にも重光の働きがあったことが推測される。さらに応永十五年

に義満は、備前居都莊下村を教言に、上村は教遠に一円知行させている。所領安堵である。この時、義満に披露したのは日野重光であったので、教言は「難有々々」⁽⁴³⁾と記して、暗に重光の口添えがあったらしいことも匂わせている。

山科家は家職として天皇家の衣装を調進し、そのほか「引物」の御服を、求めに応じて作成し献上していた。そのため月宛と言われる月給を代々天皇家から支給されていたが、先述のように応永十四年年末から天皇家の元三呉服の費用や引物の費用は義満や北山院康子から頂くことになった。応永十五年、天皇の北山第行幸の話が持ち上がると、その際の「御引出物御服」の調進という注文も加わり、そのための布地は未着であるが、百貫文という大金が下されている。⁽⁴⁴⁾翌月二月には、北山院の北山第行幸の際の上童装束の調進が高倉永行と山科教興に命じられるなど、⁽⁴⁵⁾衣装製作の仕事は義満・北山院時代に増大し、山科家の役割も急速に重くなっている。

来る三月の行幸を控えて、山科家はもとと笙を得意とする楽の家でもあったので、北山院の居所北山殿南御所で義満やその子義嗣が「習楽」をする際には、教興や賀安丸が召されていた。御服調進と楽の稽古で大忙しであった日々が終わり、応永十五年三月八日、先述のように後小松天皇は北山第に行幸し、次いで崇賢門院御所に行幸、楽、連歌、舞、蹴鞠などを挙行了たあと、二十八日に還幸している。行幸前に教言は「鈍色」の衣を義満から贈与され、「希代事也」と感激していた。行幸最中、教興は天皇の「御劔役」を務めてもいる。還幸直後、日野重光は従一位に、義嗣は正五位下そして従四位に昇進した。

その義嗣が内裏で元服するのは四月二十五日のことである。義嗣の樂の相手を務めた山科嗣教(賀安丸)はすでに応永十四年重光の猶子となっていたのだが、十六歳になったこの歳(応永十五年)四月二十七日、北山第で元服し、義満が加冠するという名譽を頂く。教言は「希代事也」「頗過分過分」「手足之舞踏不知也」と喜んで、馬一疋、白太刀を義満に進上している⁽⁴⁶⁾。

五 義満時代から義持時代へ

足利義満は応永十五年五月六日、五十一歳の生涯を終える。五月初めから病状が悪化したり減じたりして、世間の人々は一喜一憂したのだが、とうとう六日に亡くなると、教言は「珍事々々」「天下諸家哀慟無極々々」と記し、死を悼んでいる⁽⁴⁷⁾。

義満時代の特徴は將軍家が大守護家を討伐して、武家政権として安定した体制をつくったばかりでなく、持てる財力で天皇家を援助し、天皇家の文化をも取り入れることによって、公家や寺社をも配下に収めつつあった点にあったと思う。まさに権門体制は完成間近であった。そしてそれを可能にしたのは、国内の安定と、義満の採用した「善隣友好」を旗印とする日明貿易であったと思う。明船が到着すると兵庫まで自ら足を運んで見物し、明からの使節を名所に案内し、自ら明服を着て、唐興に乗り、明人に担がせるなど、明との交易を認めていたため、貿易による大きな利を手にすることができた。そしてこうした義満の大きな経済力が天皇家との共存を可能にしたのであり、義満が

計画的に天皇権に肉薄し篡奪を望んだという評価は再考の余地があると思う。

義満は正室を天皇家の准母とした。そのことは、後小松天皇からはむしろ義満の好意にとらえられたように感じる。いっぽう愛息義嗣(母は春日局摂津能秀娘)を内裏で元服させたのは、義嗣を将来天皇家の養子にしようとするねらいがあったのかも知れない。しかしこの計画は実現せずに終わる。義嗣は上杉禪秀の乱に加担したとの理由で応永二十五年、幕府に処刑されてしまう。この義嗣の死は、義嗣に親しく仕えていた日野持光と山科教高にも及び、二人も連座して殺されてしまう。日野家と山科家は大打撃を受けるのである。兄教冬の死によって応永十六年に山科家の当主となった教興の日記が、父教言のそれに比べてきわめて少なく、また応永二十四年七月で終わっているのは、こうした山科家の蒙った厳しい現実の反映であろう。

義満の死(五月六日)によって、將軍義持時代が幕を開ける。義持は五月九日、後小松天皇が故義満に太上天皇の尊号を贈ったのに対し、義持はそれを辞退している⁽⁴⁸⁾。このことは、義満時代との落差を世間に見せつけた。五月十日、義満の遺骸は等持院で荼毘に付され、昵懇の廷臣たちは淨衣で葬儀に加わった。「御所」義持、「新御所」義嗣を初めとして、公卿として日野重光、広橋兼宣、北畠、勧修寺、中山、万里小路氏が、殿上人として烏丸豊光、山科教興ら七名余が従っている。その後山科嗣教も重光の指示で義嗣の元に召され、二十七日(ふたなぬか)まで等持院で義持や重光、山科教冬の籠居・焼香がなされた。この間の食事は、主として日野重光が負担している。また重光から嗣

教に染帷子が与えられたので、教言は「闕如之処難有、悦喜々々」と喜んで⁽⁵⁰⁾いる。日野重光はその後も教冬父子などにも帷子を与えるなど、山科一族に広く目を懸けていることがわかる。

いっぽう義満正室で准后となっていた北山院康子は、六月一日、山科教興の参賀をうけている。女院が義満と共に住んでいた北山第には、六月七日義持が移ってきて、その北御所を居所と定めた。義嗣は生母春日局の里邸に移動させられている⁽⁵¹⁾。康子の居所は北山殿南御所で、変化はなかった。

「北山殿」義持は十月八日、公家方申沙汰を日野重光、武家方申沙汰を伊勢貞行と決定し、重光への信頼度の厚さに変わりのないことを示した。

北山院は八月二十九日壬生地蔵堂に参詣、十一月には地藏本願經の談義を聞き、相国寺で大施餓鬼を行い、八日には奈良に向かい、東大寺の大仏に参籠し、十三日大仏殿に万燈会を挙行している。そして二十四日には再び壬生地蔵堂に参籠するのである⁽⁵²⁾。康子は義満死後の応永十五年後半、義満後室として義満の菩提を弔う役割に集中していたことがわかる。

そしてこの年末から天皇家の元三御服は北山殿義持から天皇家に進められることになった。この年の元三御服の費用は七十二貫文であった⁽⁵³⁾。義持とは別に、北山院は天皇家に進上する御服を御服所に注文し、進上させることを続けている⁽⁵⁴⁾。応永十六年年末に女院から山科家に下された内裏に進上する御服の料足は合計六十一貫文であった⁽⁵⁵⁾。応永十七年以後の御服の調進については、山科家の教言の日記にも教興のそ

れにも記載がないので、どうなったのかは判明しない。

応永十六年七月ごろから三条坊門万里小路に新第を作り始めた義持は、邸宅ができあがった十月二十六日、ここに移徙⁽⁵⁶⁾している。義持は北山院とは親しく、また准后として女院を尊重していたようである。実母ではないが義母の立場にあったからであろう。応永十九年四月、北山院は義持の三条坊門第に移徙⁽⁵⁷⁾している。このように義持は義満の採った天皇家との急接近策の一部には反発しながらも、天皇家への経済的支援策は継続し、北山院康子とも協調路線をとっている。北山院は義満の仏事を翌応永十六年にも丁寧につとめるかたわら、二月一日、壬生に参籠中義満の夢を見たとして、義嗣に習樂を勧めている⁽⁵⁸⁾。習樂とは、笙や笛、琵琶などの練習をいう。禁裏との共通の文化に堪能になることを求めている点からみれば、康子は義嗣の母代わりをつとめているように見える。義満の娘聖久も、義満生存中より寺社への行樂に伴って、実の娘のようにかわいがっていた様子が見受けられる。その聖久の料所のひとつが水田郷であり、ここは山科家の所領でもあったので、山科家としてもこの莊園からの年貢徴収に力を入れざるをえなかった⁽⁵⁹⁾。

名笙糸巻を家宝として伝来し、楽の稽古に務めてきた山科家に対し、二月四日、義嗣から教言に新しく青地金欄の笙袋が下された。この袋は以前に拝領した白地金欄より「猶結構」な袋であったので、「殊以畏入者也」「可秘藏々々⁽⁶⁰⁾」と教言は喜んでいる。

応永二十年三月十六日に日野重光が亡くなるまでは、義持時代になっ⁽⁶¹⁾てはいたが、日野重光への義持の信頼度も厚かったため、北山院

は義満の供養仏事に専念することができた。義嗣も楽のほか蹴鞠を楽しんでいたりして、朝廷文化を吸収しており、『沙石集』を山科家に頼んで贈ってもらったりしている。⁽⁶¹⁾ 日野重光から引き立てられ多くの扶助を受けてきた山科家は、公家ではあるが、教興と子の嗣教は義持と義嗣に任せ、教興は重光邸にもしょっちゅう参じて奉公するというスタイルで暮らしていた。その他教興の従兄弟にあたる教遠とその子教高、教興の兄教冬などが廷臣として活躍していた。しかし教冬は応永十六年七月に卒しているので、山科家の朝廷と將軍家へのご奉公を抜きなく務める大役は、応永十六年に四十一歳であつた教興の双肩に重くのしかかってくることになる。

重光の亡くなる二十年の前身、応永十九年、義持と北山院は五月にそれぞれ義満の冥福を祈って法華八講などを修法している。この年の八月、後小松天皇は皇子躬仁親王に譲位し、称光天皇が誕生する。そして後小松上皇の院執権には、重光に代わつて義持自らがその任に就いている。⁽⁶²⁾ こうして義満時代とは異なつた様相が見え始めた応永二十年三月十六日、日野重光は薨じたのである。⁽⁶³⁾

重光の死後、院執権は重光の弟烏丸豊光に再び移動している。またこの年には義持の祖母紀良子(足利義詮室・石清水社僧通清の娘)が七月に亡くなつたので、義持はその遺骸を翌年高野山金剛峯寺に納めている。⁽⁶⁴⁾ 応永二十一年五月六日の義満の七回忌には、院中で後小松上皇が法華懺法を修していることが注目される。⁽⁶⁵⁾ 後小松天皇の脳裏には、義満時代の天皇家と將軍家の蜜月情況がよみがえつていたのであろう。

応永二十三年、義持は凡帳面に例年の如く五月には義満の追福のた

め等持寺で法華八講を行つてゐる。⁽⁶⁶⁾ その二ヶ月後の七月一日、後小松上皇の仙洞御所で火災が発生、火は禁裏に及ぼうとしたため、將軍義持らは駆けつけて上皇を助けている。仙洞御所の造営は十三日から始まり、二十九日には立柱の儀が行われるなど、⁽⁶⁷⁾ 義持は素早く対応している。この間、義持は北山院のもとに正月に参賀するなど、女院とはかつてほどではないにしても、良い関係は保つていた。

しかしこの年八月に、関東管領を辞した上杉禪秀(氏憲)が、反義持・反足利持氏勢力や一門・姻族と力を合わせて挙兵するという上杉禪秀の乱が勃発する。その余波で、反義持と見なされた弟義嗣は、十月三十日、山城高尾に逃れ、次いで出家し、義嗣に仕えてきた山科教高(教興の従兄弟教遠の息、嗣教(教興息)も出家するという事件)⁽⁶⁸⁾ が持ち上がる。教高や嗣教は楽を通じて義嗣と親しかつたためである。十一月、幕府は足利義嗣を林光院に閉じこめ、山科教高ら四人を加賀に送つている。十一月二日、伏見宮貞成親王は『看聞日記』にこれらの人々について「故北山殿被寵愛誇榮花、事傍若無人」⁽⁶⁹⁾ と記している。

翌応永二十四年、院執権には日野有光が任じられ、山科教遠(教高の父)は民部卿を辞めさせられた。⁽⁷⁰⁾ そして將軍家では義持の子義量の元服が行われ、義持、義量父子は称光天皇のもとに参内し、次いで後小松上皇の東洞院仙洞御所に参るのである。⁽⁷¹⁾ 義量の実母は義持室・日野家から出た栄子であるので、日野一族中の持光は次の年に処刑されるが、栄子や有光などは將軍家の信頼を勝ち取つていた情況がよくわかる。

応永二十五年正月、幕府は右述の足利義嗣を殺し(二十二歳あるいは

二十四歳といわれる)、日野持光、山科教高を殺した。上杉禪秀の乱に加担したとされる人々は、山名、畠山、世保氏にも及んでおり、この乱の根深さと、義持の危機感の広がりがかげえる。義持は十一月、富樫満成を高野山に追放した。貞成親王は「富樫兵部大輔今曉没落云々、室町殿北野参籠中御突鼻云々、近日権威傍若無人之処、俄之儀、今更人間不定被驚了」⁽⁷³⁾と記して、富樫氏の運命が突然逆転したことに驚いている。

この応永二十五年ころより、義持独自の施策が見られ始める。上杉禪秀の乱関係者と見なされた人々に対する厳罰はその一端であり、応永二十六年七月には兵庫にやってきた明使呂淵をわざわざ論して明に帰国させ、東寺に命じて異国を調伏させている。⁽⁷⁴⁾これは義満時代の外交方針とは正反対の施策であることは明白である。北山院を尊重していたことに変わりはないが、北山院にとっても、義満時代との違いがひしひしと感じられたに相違ない。

その北山院康子は応永二十六年十一月十一日に亡くなる。十一月四日、病の重くなった康子案じて義持は北山院のもとに駆けつける。

「北山女院御悩急之間、室町殿馳御参云々」と『看聞御記』は記している。そしてついに十一日、後小松上皇准母准三宮北山院康子が薨じた。このとき天下の触穢・諒闇について議論され、女院は仙洞の准母であるが触穢は頭弁裏松義資(重光の子息)が籠居するに留め、天下の触穢とはしない、諒闇もない、と決定された。このような扱いは以前の准母の死のときよりも軽いものと言わざるをえない。伏見宮貞成親王は十四日、「故北山殿(義満)御時有限号、一時之栄一睡之夢也、

至死期非准母之儀、人間不定今更被驚了」と感想を述べている。康子の立場は、義持から一定の尊敬を集めてはいたが、義満・重光が健在であったころの輝きほどではなくなっていたことがわかる。

六 日野康子、日野栄子の役割

右に述べてきたように、康子は准母と成って以後、後小松天皇に対する御服調進を内蔵寮御服所を管轄する山科家に命じて執り行わせ、それに要する多額の費用を渡して天皇家の経済を助け、天皇家と將軍家の間に立つて人的交流をはかり、將軍家に天皇家の文化を浸透させるという役割を果たしたといえよう。こうした康子の役割の成就を助けたのは、実家日野家の重光や義資、有光また烏丸豊光(康子の兄弟)などの公家としての働きと共に、康子の妹が義持室となり、のちに称光天皇の准母となること、盛光の姉妹資子は称光天皇の母で、のち後花園天皇の准母となつてゐることなどであつた。それだけではなく、資子の姉妹は後小松院の女房に、資子のいとこである有光の娘は称光院の典侍になつており、また有光の娘と姪が後花園院の典侍となるなど、天皇家の女房に広く日野一族の女性たちが入つてゐるということが系図から見て取れた。彼女らが天皇家と將軍家の双方から康子を支えていたことが挙げられよう。

後小松天皇の、義満と康子との交流と二人への感謝の念の厚かつたことは、先述の義満生前の応永十五年三月の天皇の北山殿と崇賢門院への行幸にあらわれている。天皇家と將軍家の文化的交流も、後小松

天皇は義満時代は義満や重光を介して行い、義持時代になつてからは、樂の伝授を自ら山科家に対して行う（応永十七年十月十六日条『教興卿記』など。この日教興は後小松上皇から直々に笙曲団乱旋の伝授を北小路宿所で受けている。教興は家宝の笙糸巻で吹いている）など、天皇家として伝統文化の普及を、將軍家の力を借りつつ行う天皇であつた。

北山院康子の死後、義持は正室日野栄子と共に寺社参詣などを繰り返し、その子義量へと將軍家を継承させるが、幕府に集う大名たちは管領を中心に力を蓄え、幕府では吏僚と呼ばれる官僚的武士層の形成がはじまり、中でも伊勢氏は応永二十八年ごろより存在感を増大し始めるのである。

七 足利義持の晩年と義量時代

足利義持は応永三十年（一四二三）三月、実子義量に將軍職を譲る。

義量は義持とその正室日野栄子との間に応永十四年（一四〇七）に生まれた子である。そして十七歳で將軍職を就封した。しかし義量は少年時代からの大酒が収まらず、父義持から諫められ、近臣たちに誓書を出させるありさまであつた。このように義量は父母の期待に反する青年であつたので、実質的な將軍の権限は義持が引き続き掌握している。義持はこの時代、公家に対する出仕停止などの処罰権を發揮し、また庭田氏と四条氏の所領争いを裁許したが、後小松院と義持夫妻との仲が良好であつたため、天皇家との軋轢は生じなかつた。当代の天皇は称光天皇（在位応永十九—正長元）で、その父は後小松天皇、母は日野資

子（実父は日野資國。資教の娘として天皇家に嫁す）であつたからである。後小松院にとつて、子の称光天皇が病弱で「大酒」であつたこと、また天皇の弟小倉宮が応永二十九年になくなり、もう一人の皇位継承候補者皇弟小川宮の「御酔狂」が過ぎるなどの難題が山積していたから、天皇家は將軍家と協調路線をとる姿勢を堅持していた。

義持は応永三十年八月、駿河守護今川範政に旗を与えて鎌倉公方足利持氏を討たせたので、十一月持氏は罪を認める。しかし応永三十二年二月に足利義量と小川宮が相次いでなくなつたため、持氏は義持の猶子となろうと画策したが、義持は使僧にも対面せず、これを拒否している。⁽⁷⁸⁾

そしてついに足利義持が病に倒れる。正長元年正月のことである。そのため六代將軍は義持の同母（勝鬘院藤原慶子）の兄弟義教が継承することになった。義教は義持死後天台座主から還俗し、將軍職を嗣ぐのである。義教が継承することを見届けたその翌日十八日、義持は薨じている。

義持の治世は、義満の姿勢を継承した面と断ち切つた面と両方があつた。公家に対しては、廷臣を幕臣の如く従わせる方策を継承し、それ故処罰権を行使している。天皇家との親密な関係を持続したため、足利持氏追討に際し、旗を今川範政に授けて將軍家の權威をより高めた。朝鮮外交は継承し、大藏経その他の品を送られ、明の俘虜を釈放（応永三十一年）している点から考えると、義満ほどの積極性はないが、対外政策も義満の政策をほぼ継承していたとみられる。ただ義満に対する太政天皇の贈呈は恐れ多いと感じて辞退したのであろう。

義持の晩年、日野家の一族は、従一位日野有光が応永三十二年三月、義量の死に殉じて出家している。有光に代わって日野資教が「准大臣」になったが、この人も出家している。続いて七月、日野義資が「院執権」に任じられる。いよいよ義資時代の到来である。国母日野資子にはこの年（応永三十二年）「光範門院」の院号が与えられる。そして義持の正室日野栄子は將軍の生母、称光院准母として尊崇されていたが、義量の死と、二年後の義持の死によって、義持と共に、政治的生命を失うのである。

つまり、日野家の男女は、義持、義量時代、称光天皇の生母が日野資子であったことを背景に、義満時代同様、公家ではあるが將軍家に最も近い廷臣・親族として、時めいていたのである。日野家の地位が傾くのは、次の足利義教時代である。

おわりに

足利義満時代は義満の朝廷に対する圧倒的な強権発揮を軸に語られてきた。しかしその背景には、將軍家が正室を公家の日野氏から迎えていたこと、関白一条経嗣や二条良基などの公家を義満が重んじて重用したことなど、公家をその経済力に物を言わせて、臣下のように服属させていた点にあったことを論じてきた。こうして武家の棟梁たる將軍家が朝廷に対して大きな発言権をもって、南北朝合一を実現させ、公家階級を幕臣のように扱い、そうした公家を通じて朝儀に介入し続け、寺社には大きな寄付を与えて懐柔していた実態の一端を明らかに

できたと思う。特に公家層のうち、摂関家の一条、二条家や院執権を兼ねる日野家、その家司として日野家に密着していた山科家を通じて、足利義満は朝儀の進め方を会得し、朝廷の文化を吸収して武士の文化に朝廷の儀礼や式楽を加味し、またはやりの連歌や猿楽をも取り入れた新たな室町文化を形成しつつあったと考える。

公家の日野家や山科家は、廷臣であると同時に義満時代幕臣に近い位置にあったため、將軍義満時代が終わり、義持時代に移行すると、將軍家後継争いや上杉禪宗の乱など幕府の抱えた争乱に必然的に巻き込まれることになった。

こうした政治上の変化の中で、義満正室康子は義満の内意を受けた朝廷の議決によって、天皇の「准母」となり「准三宮」「准后」となったのである。康子すなわち「北山院」は、義満死後も義満の公家との接触路線をよく継承する傍ら、義満の菩提を弔う後家の役割をよく果たした。後家となつてから、亡き夫の菩提を弔う姿は鎌倉期の北条政子やこれより後の日野富子ら、將軍家の正室と同じである。康子についての史料は少なく、義持生存中の仲の良い夫婦像しか残っていないが、栄子の將軍家正室、称光院准母としての役割も、康子の場合と大差ないものであったと思われる。

本文で検討したような日野重光や日野町資藤、また康子や栄子などの活躍の背景には、日野家の女性たちの多くが天皇家の女官として出仕し、その上で後宮に入るものも輩出していたこと、また日野家の庶子の男性たちは、様々な寺に入り、当時の朝廷政治や幕府政治を支えていたことが、日野家の当主や將軍家妻室の昇進や活躍を支え保護す

る支柱となっていたと考える。

注

- (1) 今谷明『室町の王権』（中公新書）中央公論社、一九九〇年。
- (2) 注①書。
- (3) 義満が天皇家と同族であったという事実は、義満が天皇家や公家に対する劣等感をもちあわせなかったことにつながる、との説は、渡辺世祐氏「足利義満皇胤説」（『史学会雑誌』37編10号）以来唱えられてきた。
- (4) 『教言卿記』第一・第二・第三、続群書類従完成会、昭和45・46・47年。
- (5) 前掲『教言卿記』及び『教興卿記』全、続群書類従完成会。昭和49年。
- (6) 応永二十五年に処刑された。
- (7) 「系図I」「表I」は『尊卑分脈』から作成したものである（『新訂増補国史大系尊卑分脈』第一〜第四編・索引、吉川弘文館、一九五七〜一九七七年）。
- (8) 『山科家礼記』三、五、続群書類従完成会、一九七〇年、七三年。
- (9) 今谷氏前掲書。
- (10) 『教言卿記』第一（注（4）参照）、「日野家系図」（注（7）参照）。
- (11) 『荒曆』応永十三年十二月二十三日条（『柳原家記録』百四十五所収）。
- (12) 『教言卿記』応永十三年五月九日条。なお以後『教言卿記』からの注記は年月日のみを記すこととする。
- (13) 応永十三年十月十九日条。
- (14) 『迎陽記』（『史料纂集』古記録編、八木書店、二〇一一年）。
- (15) 『迎陽記』（注（14）参照）。
- (16) 応永十三年十一月二十五日、二十七日条など。
- (17) 『宝鏡寺文書』。
- (18) 注（11）参照。
- (19) 注（11）参照。
- (20) 横井清『看聞御記』そして、一九七九年。

- (21) 応永十三年十二月二十七日、十四年正月五日条。
- (22) 『教言卿記』第二。
- (23) 応永十四年三月五日、六日、十一日、十八日条。
- (24) 応永十四年三月二十三日条。
- (25) 応永十四年四月二日条。
- (26) 応永十四年十一月十九日条。
- (27) 応永十四年四月四日、五日、十三日、五月十二日条など。
- (28) 応永十五年三月八日、十四日、二十八日条など。
- (29) 応永十五年三月二十八日、二十九日条。
- (30) 応永十五年四月二十五日条。
- (31) 応永十四年九月九日条。
- (32) 応永十四年十月十九日条。
- (33) 応永十四年七月一日条。
- (34) 応永十四年十月二十八日条。これは「兵庫倉料足云々」と記されているので、日明貿易に伴う諸収入より出されたものであると推測される。
- (35) 応永十四年十一月二十日条。
- (36) 応永十四年十一月二十七日、十二月朔日条など。
- (37) 応永十四年十二月二十九日条。
- (38) 応永十四年九月八日、九日、十月十日、十二月二十九日条。
- (39) 応永十五年正月一日条。
- (40) 応永十四年正月五日条。
- (41) 応永十二年六月十九日、七月十日条。
- (42) 応永十二年八月十六日条。
- (43) 応永十五年正月二十五日条。
- (44) 応永十五年正月二十一日条。
- (45) 応永十六年二月七日条。
- (46) 応永十五年三月六日、四月二十七日条など。
- (47) 応永十五年五月六日条。
- (48) 応永十四年十月二十日条。
- (49) 前掲『尊卑分脈』足利義持の項。

- (50) 応永十五年五月十日、十六日、十九日条など。
- (51) 応永十五年六月一日、七日条。
- (52) 応永十五年八月二十九日、十一月三日、六日、八日、十二日、二十四日条。
- (53) 応永十五年十二月五日条。
- (54) 応永十五年十二月晦日条。
- (55) 応永十六年十二月七日、二十七日条。
- (56) 『大乘院日記目録』（『大乘院寺社雜事記』に所収、竹内理三編『続史料大成』37巻、臨川書店、一九七八年）。
- (57) 『大乘院日記目録』（注〔56〕参照）。
- (58) 応永十六年二月一日条。
- (59) 応永十六年正月四日条など。
- (60) 応永十六年二月四日条。
- (61) 応永十六年閏三月七日条。
- (62) 『山科家礼記』（前掲）応永十九年五月一日、二十日条、八月二十九日条など。
- (63) 『教興卿記』 応永二十年三月十六日条。
- (64) 『教興卿記』 応永二十年七月十三日条。
- (65) 『続史愚抄』（『新訂増補国史大系統史愚抄』前、中、後編、吉川弘文館、一九六六年）。
- (66) 『満濟准后日記』（『訂正三版満濟准后日記』上、下、続群書類従、続群書類従完成会、一九六〇年）。
- (67) 『看聞御記』（続群書類従・補遺二、続群書類従完成会、一九九九年訂正三版） 応永二十三年七月一日、十三日、二十九日条。
- (68) 『看聞御記』（前掲）十月三十日条など。
- (69) 『看聞御記』（前掲）十一月二日条。
- (70) 『公卿補任』（『新訂増補国史大系公卿補任』53巻・57巻・別巻、吉川弘文館、二〇〇〇年・二〇〇一年）。
- (71) 『看聞御記』（前掲） 応永二十四年十二月一日、十三日条。
- (72) 『看聞御記』（前掲） 応永二十五年二月十五日、六月六日条。

- (73) 『看聞御記』（前掲） 応永二十五年十一月二十四日条。
- (74) 『満濟准后日記』（前掲）など。
- (75) 『花宮三代記』（『訂正三版群書類従』第26輯、続群書類従完成会、一九六〇年）。
- (76) 『兼宣公記』（『史料纂集古記録編兼宣公記』第一・第二、八木書店、一九七三年、二〇一二年）、『看聞御記』（前掲）など。
- (77) 『看聞御記』（前掲）など。
- (78) 『看聞御記』（前掲） 応永三十年八月十一日、三十二年二月十六日、二十八日条など。なお以下の本文で用いた史料は右に示した『看聞御記』、『満濟准后日記』、『兼宣卿記』などに依っている。